現代ジャズ・ダンスの研究
——ダンスの新分野として——

若松　美黄，栗原　理子

A Study of Contemporary Jazz Dance as a New Field of Dance

Miki Wakamatsu and Riko Kurihara

Abstract

The purpose of this study is to clarify the concept of Jazz dance, which has long been considered to belong to the Negro Arts or to be merely musical entertainments.

The field of Jazz dance encompasses popular dancing, musicals, Negro dances and dance exercise with Jazz accompaniment.

The first part of this paper considers Jazz dance through four Major books by C, Sachs, J. Martin, W, Terry and W, Sorrell which were published at intervals of about ten years in 1937, 1946, 1957 and 1967 respectively.

The next paper shows the development of Jazz ballet and analyzes Jazz Movements in dance based on polycentrism, the isolation and half relaxation of individually moving parts of the human body with syncopated rhythm.

The last part considers the contemporary tendency of Jazz dance through articles seen in the Dance Magazine from 1975 to 1984.

The result concludes three points.

1. Jack Cole as the father of Jazz dance.
2. The new style of Jazz ballet as a fusing culture.
3. The emergency of boy's Break dance.

These three points are forming a new idea of Contemporary Jazz dance.

序　言

「1000ページ，5000項目に達する[3)]」舞踊辞典 The Dance Encyclopedia にジャズ・ダンス（JD と略す）の項がない。1977年以後，初版の舞踊辞典に項目が見られるのは JD がまだ新しい分野に属しているからであろう。80年代においても JD はまだ定まったものと

言えず，例えばDance Magazineの記事の量をBallet（Bと略），modern dance（Mと略），JDと比較すると83年以後ではJDが増加し，Mを上まわる分量となり，まだ変化の途中であると言えよう。

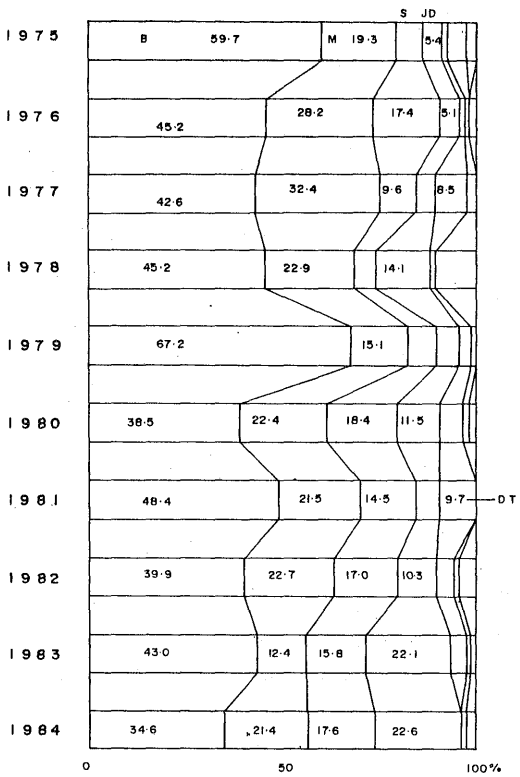

Fig. 1 Special articles seen in the Dance Magazine from 1975 to 1984（Vol. XLIX-1～LVIII-11）

こうしたJDの変化・発展を85年現在の視点で把えることを目的として，次のような三つの構成をとる。

1．60年代までのJD——1937年より約10年おきに出版されている四大舞踊概論を検討する。

2．60年代以後の補遺——JDの新しい変化・発展などを新しい文献を基に補遺を行う。

3．80年代のJDのtopics——Dance Magazineを対象とした考察を行う。

この考察に必要なJDの規定は範囲と分野が示されれば良い。JDの範囲は1においては広義とし，ジャズ音楽使用のダンスを指し，次に2，3では狭義とし，JDの動きを把え，そのidiomを持ったダンスとする。

分野は舞踊辞典[5) 26)]に基づき，1．Musicals（Muと略）——一切のショー・ダンスを含むもの，2．Negro dance（Ngと略）——黒人のダンス，3．Popular dancing（Poと略）——20世紀の非観賞舞踊，4．Jazz Ballet（JBと略）——ジャズ音楽使用のB，とCode化を行い，さらに現在のJD教習の流行から，5．Exercise of dances（Exと略）の五つとする。

1．60年代までのJD観

四大舞踊概論は，1．Sachs, The World History of the Dance, 1937,[36)] 2．Martin, The Dance, 1946.,[31)] 3．Terry, The Dance in America, 1956.,[44)] 4．Sorell, The Dance through the Ages, 1967.,[40)] である。

（1）SachsとJD

Sachsの業績はダンスの技法を対立する要素に分類し，色々な現れを民族を対比することで類型を抽出し，これを分析した。主としてPoをとりあげているが，20世紀以後の記述は5頁と少なく，spectacular danceも，1章18頁のみであるが，舞踊概論の出発として欠かすことのできない文献である。

Po, Ng

彼の基本主題は，ダンスが時代を反映するという理論の展開である。20世紀のPoの動きを閉鎖的性向と見，「機械時代の人間はグロテスクで大げさな身振りを捨て，内面的閉鎖に向うことは不可避である」[36)]（p. 446）とした。

音楽的特長をSyncopationに置き，性的要素の強調を見，「20世紀は身体を再発見した」（ibid. p. 447）と述べ，NgやCreole（フランス系白人黒人の混血）のstepsは「スペイ

ンやスラブ舞踊の初期の姿と厳密に一体化し一致する」(ibid. p. 444) と歴史性の一貫した現れと見た。

Mu

Po と Mu を同じ時代表現だとすれば，彼には Po の Waltz と Noverre の Ballet の改革が同一の表出相とならなければなるまい。「ワルツの勃興は真実，単純，自然回帰，原始主義であり」(ibid. p. 441)，一方 Noverre[33] の改革は「自然回帰，個性，魂，真実，情熱などのキー・ワードがどの頁にも見られる」とその著書を引用し，「20世紀のロシアバレエこそ，その実現の端緒である」(ibid. pp. 442-3) とした。こうした観点は舞踊現象を把える根幹となろう。

非ヨーロッパ文化との対比では伴奏リズムとダンスの喰い違いを述べ，Eskimo の唄と伴奏リズムがズレて「唄が4/8拍子，伴奏が9/8拍子となり……東アフリカのワスゲジュ・ダンスでは伴奏テンポが速くダンスはおそい」(ibid. p. 176) と例示している。これはヨーロッパの伝統舞曲では意識されなかった要素で，JD によって効果的に活用されたものである。

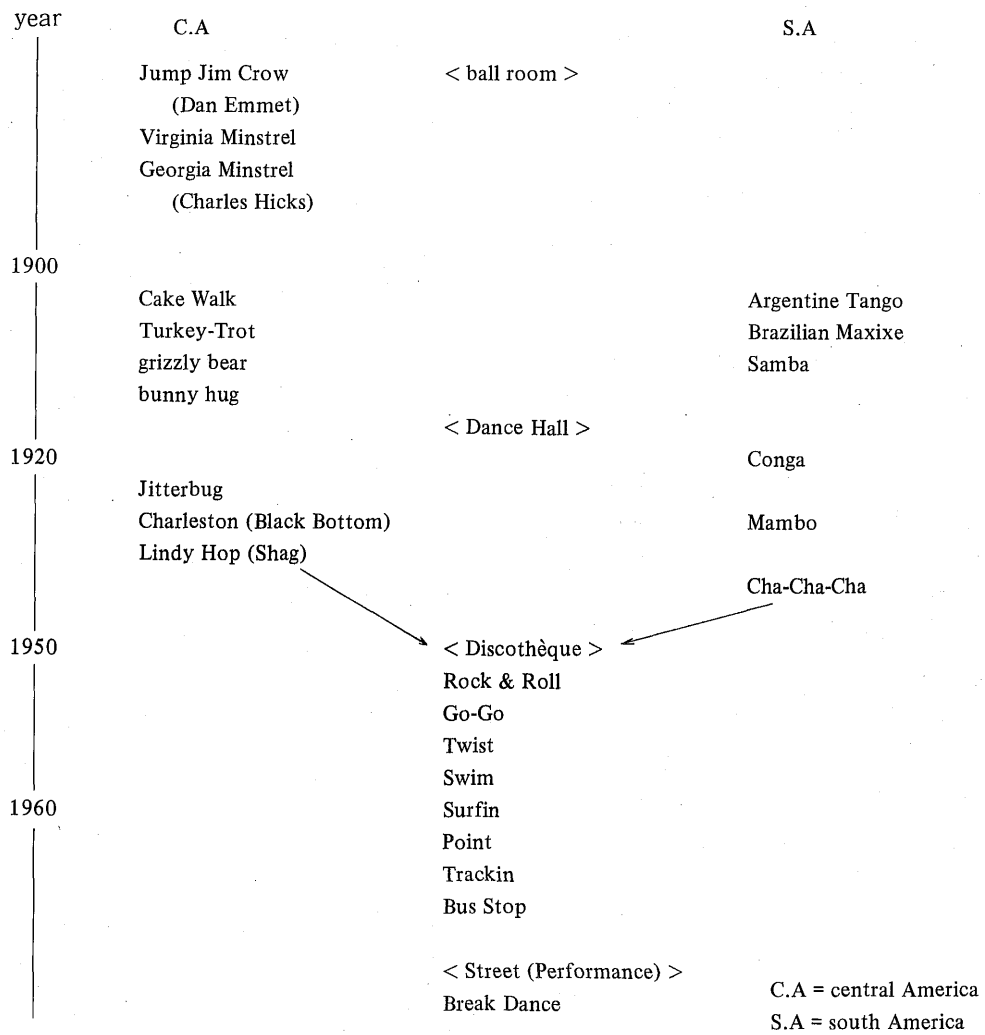

Fig. 2 Dance forms and places. Center part shows names of dancing places.

（2）Martin と JD

Martin の業績によって Americana のダンス文化が確立された。61年，Horst がこれを規定した[21]が，このことは JD を自国文化として押し上げる意味となり，JD の主要項目が論述される結果となった。ただ Ex については，彼のIntroduction to the Dance[32]に詳しく，本書には記述がない。

Po, Ng

Po を都市生活の孤独感を解消する「巨大な集団に参加する一体感の動き」[31]（p. 26）とし，その歴史的発展法則は，常に卑俗から精練に向い「下品な起源を持ちながら，後には大衆に受け入れられる」（ibid. p. 28）性質があるとした。現在「古い時代感覚が槍玉にあげている下品で不快なものとするジャズ・ダンシングもやがて大衆化する」（ibid. p. 32）と指摘した。JD（ダンシングの語が使用）の初出と，Ng 出生から都会的精練に向う指摘の二点は重要なポイントである。しかも一方で Americana のヒューマニズムか Ng を「あらゆるダンス領域において極めて明るい前途」（ibid. p. 147）としている。

Mu, JB

"Dance in the Technological Era（ibid. pp. 148-55）" の1章に熱意を込めて Mu を論じ，Cole を含む振付師や踊り手をとりあげ，一方，JB にあたる De Mille[注1]の'Rodeo'（1942），Robbins[注2]の'Fancy Free'（1944）などを "American roots（PP. 89-104）" として評価している。

（3）Terry と JD

Martin は1893年生れ，Terry は1913年生れ，20歳の年齢差は同じ Americana の立場の彼を，進歩的・実証的傾向としている。

Po, Ex

彼はダンスを社会に必要なものとし，コミュニティ創りの交際機能の役割，宗教的必然性，ついに娯楽となったと展望した。特に square dance を生み出した Shakers が新世界に汚れなき世界を求め「踊ることを通して，彼等の肉体から罪が振り落ちる」[44]（p. 28）と信じたことを指摘し，American roots とした。

Po の Ex がヨーロッパの行儀作法を教える側面を持っていたことを述べ，Dodworth とその一族が「1835年から1920年までのほぼ100年間，ダンス学校を開いた」（ibid. p. 35）こと，やがて20年代になるとそうしたダンス学校が衰退した（ibid. p. 242）と述べている。また，学校ダンスや dance therapy を位置づけた（ibid. pp. 241-3）。

Ng, Mu, JB

彼は Ng を black と置きかえた（"The Black dance" ibid. pp. 156-64）。黒人の地位を白人と同等なものという視点で，1840年代の黒人ダンサーの Juba と，ジャズ音楽で jig や shuffles を踊った白人ダンサーの Daddy Rice の minstrel を並べ対比した（ibid. p. 34）。そのため JD の源泉にも白人の Horton を登場させ，彼は「アメリカ・インディアンに関心を持ちその基礎を黒人ダンサーに展開し」その影響で Ailey[注3]が生まれた（ibid. pp. 160-1）と述べている。

彼は JB の語を使用し（ibid. p. 163），ここでも De Mille などの作品とともに黒人舞踊団の Dance Theatre of Harlen を同等に並べている。また Mu と JB の融合をも意図したようである。Balanchine[注4]の'On your Toes'を「Ballet の背景からきた小さな芸術的革命」（ibid. p. 223）とし，M の Humphrey,[注5] Weidman[注6]などを位置づけ，幅広い視野をとった。

（4）Sorell と JD

Sorell はオーストリア系移民で，Mary Wigman の The language of Dance の英訳[41]なども知られている。彼は Sachs をひきつぎ黒人問題を抑圧された民族に共通なものとして，一つの世界主義に立脚している。

Po, Mu, JB

宮延舞踊の Pas が Ballet の源泉になったように，Po が劇場舞踊の基盤であることを15頁にわたって例証し[40] (pp. 72-87)，Fokine[注7] は英国の morris dance を彼の Ballet 'Don Fuan'で使用し，Bournonville は'Napoli'でイタリアの tarantella を基礎とし，……Jerome Robbins はジャズの影響で仕事を行ったと述べている。Sachs と比較すると，Sachs は Po と Ballet が同一時代相であることを示し，Sorell はもっと具体的に Po の step が Mu や JB に発展するとした。彼は Robbins の'West Side Story' を Mu の頂点と観て「全世界がアメリカのミュージカルを最高のものとして受け取ることができた」(ibid. p. 268) とした。

しかし JB の観念は彼には見られない。

Ng, Ex

Sorell はジャズ音楽を黒人白人の混合と観ているが「シンコペーション，つまりジャズの精神は基本的にアフリカのもの」(ibid. p. 277) としている。"Jazz and the Negro Dance (pp. 275-83)" では minstrel の歴史をとりあげ，黒人を「芸術家として彼等はすべて生来の贈物で卓越している」(ibid. p. 283) とし，Ex については Ballet のそれについてのみ述べている (ibid. pp. 286-9) が JD については論及がない。

2．60年代以後の視点による補遺

60年代後半に JD の名著が出版され[22) 43)]，JD の歴史的考察は系統立ったものとなり，一方そうした知見から70年代に新しい動向が見られた。その動向は以下の四つにまとめられる。

1．JD の idiom が研究され，動きについて論及されはじめた。

2．Po に注目が集まり，Castle が再評価され，JD の源泉に Po を考える立場の人が増加した。

Table 1 References of JD in chronological order

1937	Sachs, C., World History of the Dance.
1941	Handy, W.C., Father of the Blues.
1946	Martin, J., The Dance.
1948	Spaeth, S., A History of Popular music in America.
1949	Chujoy, A. The Dance Encyclopedia.
1950	Smith, C., Musical Comedy in America.
1954	Fletcher, T., 100 years of the Negro in Show Business.
1956	Terry, W., The Dance in America.
1957	Hazan, F., dictionnaire du ballet moderne.
1961	Horst, L., Modern Dance Forms.
1963	Jones, L., Blues People.
1963	De Mille, A., The Book of the Dance.
1964	Stearns, M., Jazz Dance.
1965	Machabey, A., la musique de danse.
1967	Sorell, W., The Dance Through the Ages.
1967	Hughes, L., Black Magic.
1972	Croce, A., The Fred Astaire and Ginger Rogers Book.
1977	Koegler, H., Ballet.
1977	Clarke, M., The Encyclopedia of Dance & Ballet.
1977	Crips, C., Ballet.
1978	Fischer-Munstermann, U., Jazz Dance & Jazz Gymnastics.
1978	Jowitt, D., "Twyla Tharp" in Livet, A (Ed.) Contemporary Dance.
1978	Bourcier, P., histoire de la dance en Occident.
1978	Giordano, G., Anthology of American Jazz Dance.
1979	Mahoney, B., "Jazz Dance" in Reynolds, N., (Ed.) The Dance Catalog.
1980	De Mille, A., America Dances.
1981	Clarke, M., The History of Dance.
1981	Facciuto, E.L. The Luigi Jazz Dance Technique.
1983	Frich, E., The Matt Mattox Book of Jazz Dance.
1984	Hadell, B., Break Dance.
1984	Marlow, C., Break Dancing.

3．Ex に JD がとりあげられ，より洗練されたものとなり，JD の性格を都市的様相とした。

4．Mu と JB の結合が進み芸術の芸能化，芸能の芸術化が見られた。

（1）JD の動きの追求

JD の動きは初期には体系だったものでなく，black minstrel の伝統にそって，黒人の動作を誇張して演ずるなかに，B や M の

idiom を混合した継ぎ接ぎの語法であったようだ。

JD の体系をはじめて創ったのは Jack Cole である[29]が，彼はadapt したインド舞踊をジャズ音楽で演じることによって成功を治め，その体験を基にし JD の idiom を考案した[27]。

黒人の動きの特色を Stearns は，1．裸足によるダンス，2．前屈し膝や足首を曲げる，3．動物の模倣表現が多い，4．即興性の重視[43]（pp. 14-7）としているが，インド舞踊にも当嵌まる。Koegler はこうした動きを持った JD を，多中心的（polycentrism），身体部位独立的 isolated movement）[26]としている。

ヨーロッパの運動調和観は body center を中枢とするもので，B はもとより，自由な表現を目差す M においても同様で，Duncan[注8]は中枢より末端部分へ運動が波及する[12]（pp. 66-70）と考え，Graham[注9]，Humphrey もこれを継承している。

JD は中枢より動く技法と多中心的，身体部位独立的動きと混交し，それ等の束ねに syncopation が見られると言えよう。

その後70年代に TwylaTharp が出現し，中心の緊張部に強調点を置かず，弛緩部に focus を置く半脱力の用法で人気を集めた。この用法は半音 flat な mi, si, so を加えた旋法を生む Blues を身体化したものと考えられる。

近年は Tharp 用法の半脱力が見られないと，古いスタイルの JD と映ずる。

（2）Castle の再評価と Po の解釈

20世紀の Po はジャズによって活力を得た。ジャズ奏法のダンス化をいちはやく広めたのが Castle 夫妻であり，ダンスによってジャズ音楽やジャズ奏法が流行し，音楽によってさらにダンスが熱を帯びた。

ダンスの熱狂は dance mad, dance craze, 日本でお陰まいり，ええじゃないかと云い，危機の時代に流行するパターンを持っている。「1910年から1920年にかけての10年間は，アメリカ最初のダンス熱狂が巻き起った時代であった」（Spaeth）[42]。De Mille は「戦争の前にダンス熱狂が常に出現すると注釈することは興味深い」[10]（p. 18）と述べた。こうした dance mania の増加で「踊れる酒場（honky-tonks）やダンス・ホールがニューヨークに恒常的に見られるようになった」（Fletchen）[15]。

そのダンス様式は「カップルが他のカップルと独立して自由に踊る風潮」（Barzel）[1]から，カップルすら別々に踊る現在の disco. dancing に変化した。基となったのは char-

Table 2 Debuts of Ballet & modern dance choreographers in Musicals.

1) 1891, Loie Fuller, Trip of China Town.
2) 1916, Anna Pavlova, The Big Show.
3) 1922, Michel Fokine, choreograph at "Ziegfeld Follies."
4) 1923, Matha Graham, dancing at "Breenwich Village Follies."
5) 1931, Bronislava Nijinska, Tales of Hoffmann.
6) 1933, Charles Weidman, As Thousands Cheer.
7) 1936, Geoge Balanchine, On Your Toes.
8) 1941, Leonide Massine, Spanish Fiesta.
9) 1942, Jack Cole, Something for the Boys.
10) 1943, Agnes De Mille, Oklahoma.
11) 1943, Pearl Primus, Cafe Society.
12) 1944, Doris Humphrey, Swing Out, Sweet Land.
13) 1944, Helen Tamiris, Stovepipe Hat.
14) 1944, Valerie Bettis, Glad to See You.
15) 1945, Anthony Tudor, Hollywood Pinafore.
16) 1947, Anna Sokolow, Street Scene.
17) 1948, Hanya Holm, Kiss Me Kate.
18) 1951, Lester Horton, Girl Gershuin.
19) 1954, Sophie Maslow, Sand Hog.
20) 1957, Jerome Robbins, West Side Story.
21) 1958, Aileen Passloff, A Full Moon in March.
22) 1959, Alvin Ailey, Jamaica.
23) 1964, Donald Makayle, Golden Boy.
24) 1968, Talley Beatty, House of Flowers.
25) 1968, Elizabeth Keen, Everyman.
26) 1969, Rod Rodgers, Down in the Valley.

leston であろう。この charleston は Jitterbvg から変化したもので，「1924年ごろサウス・カロライナの波止場街に現われた」(De Mille[10] p. 19)。

こうした展望は必然的に Castle を再評価する認識を生む。Castle の業績を四つにまとめ以下述べる。

第一に dance に日常性をとり入れた。「彼等は150年続いた舞踏衣装をやめて，日常着のままで踊ることとした」(ibid. p. 16)。動作においても上体の捻りや肩や腰の swing などの自然な日常動作をとり入れた。

第二に本能を表現し様式化した。Castle は南米の maxixe を，ついで「タンゴの復活と大衆化をもたらした」(ibid. p. 16)。

第三に即興性を活用し，ジャズ奏法による improvisation をとり入れ，個性を発揮した。

第四にジャズ奏法の Syncopation を活用した。彼は「ジム・ユーロープにブルースを弾かせ，ステップを考案した」(Handy)[19]。Europe とは黒人のバンド・リーダーであり，又，Vernon Castle はジャズ・ドラムを得意とした。その Syncopation 感覚が彼等の振付の源泉になったのであろう。

（3）JD の Ex の流行

70年代後半になると JD・Ex は日本においても流行し，JD の名称を文案に出しているもののみの（JB の名称は除いて），朝日カルチャー・センター（東京），池袋コミュニティ・カレッジなどの健康・スポーツ・コースのなかの教室数8.60%，5.63%をしめるようになった（1984年12月現在），こうした風潮は JD を健康的・美的・都会的精練の方向に変えるであろう。

しかしこうした風潮は50年代にはそれほど見られず，名称も free-style, dance for musical comedy, Afro-Cuban，または primitive などと名乗り，JD の語も使用させずクラス数も限られていた（Mahoney)[29]。

（4）Mu と JB の融合

芸術の芸能化，芸能の芸術化と言われる時代となった。例えば芸術畑の Robbins が'The Concert'のようなドタバタ喜劇バレエを創り，芸能畑の Bennett がまじめな'Chorus Line'を創るようになった。もはや芸術と芸能を区別しない時代となった。しかし，ここまで到達するには多くの芸術畑の振付師が芸能界で仕事をしてきたことによる。Table 2 は Mu に参加した芸術畑の有名振付師の最初の仕事である。

こうした歴史は，ジャズ音楽を伴う作品がショー的なものだという観念をいましめるものである。

JD の創作舞踊論を最初に書いたのは Horst だが，彼は JD の様式を「現代アメリカの都会を味つけするもの」[21]（p. 117）と述べ，JD を「いかに芸術的様式に高めるかが課題である」(ibid. p. 117）としている。

芸術化・芸能化のはざまに次のような例がある。Herble Harper という黒人ダンサーは，一方で Tap dancer の Fred Astaire の助手となり，一方で B の Balanchine の助手となっている（Stearn[43] p. 167)。

3．80年代の JD の topics

現在の JD において何が課題かは色々な議論となろう。その議論を客観的な問題とするために，舞踊ジャーナリズムの特集記事を数量化し，その結果を考察することで果たされる。

本稿では Dance Magazine 誌を対象として選び，まず1975年以後の10年間（1984年11月号まで）119冊から JD に関する記事を抽出した。

その記事は，1．小さな批評欄，2．local news, ——などを含まない特集記事とし，その記事は裏表紙の Feature 欄，80年以前では in this issue 欄に紹介されたものに限った。

JD の範囲は狭義とし，五つの分野それぞれを JD の idiom かどうかで判定し，JD の

Table 3 Special articles seen in the Dance Magazine

	B	M	S	JD	DT	F	Mime	
1975	49.5	16	6	4.5	1	4	2	0
1976	44	27.5	17	5	0	1	1	2
1977	40	30.5	9	4.5	8	2	0	0
1978	30.5	15.5	4	9.5	1	7	0	0
1979	62.5	14	7	5.5	3	1	0	0
1980	33.5	19.5	16	10	5	1.5	0	1.5
1981	45	20	13.5	5.5	9	0	0	0
1982	35	20	15	9	4	1	0	4
1983	38	11	14	19.5	4	1	0	1
1984	27.5	17	14	18	0	1	0	2

idiom と言えるもの1，半ば言えるもの0.5，言えないもの0とした。例えば Mu についても，JD の idiom がない映画は0，JB について Balanchine の JB は0.5，Mg であっても ethnic dance が JD の idiom を持たない場合であれば0となる。すべて内容を個々に判定した。

特集記事を類別すると六つの項ができた。1．B，2．M，3．Folk dance（F と略），4．Social News（S と略），5．Dancer's therapy（DT と略），そうして 6．JD である。

10年間の特集記事の推移は Fig. 1．のようになった。

1．83年以後の JD の比率が高く22.1%，22.6%と増加し，M の12.4%，21.4%を上まわり，舞踊界で B につぐ第二の勢力となった（回帰直線勾配，1.8）。

2．B は79年を境として減少している。83年やや増加しているのは Balanchine の死による特集であることを考慮すればやはり減少である（回帰直線勾配，−1.52）。

3．M も76年，77年を境としてやや下向きとなっている（回帰直線勾配，−0.85）。

次に JD の特集記事のうち，80年代に件数が多いものを見ると12件の Jack Cole の評伝，6件の break dance 論文があげられる。これらの背後には Twyla Tharp の受賞があり重要な関連を持っている。これを主観的議論として第三の topics と定め以下考察したい。

（1）Jack Cole の評価の確立

1973年に没した彼が1983年の Dance Magazine 12回連載記事にとりあげられたことは，彼の振付スタイルが彼の死後に共通理解を得たことを示す。70年代までの JD 研究書は Cole を過少にあつかい，例えば JD の聖典と言われる stearns[43] の著書に Cole（同名別人が記載されている）は無視されている。

Mahoney は1979年 Cole を「ジャズ・ダンスの父」[29]（p. 154）とよび，De Mille は「今日にいたる範例を確立した最初の商業振付師」[10]（p. 187）とし，Balanchine への影響はもとより（ibid. p. 138），Ailey や Taylor 注[10]（ibid. p. 168）に影響を与えたと述べている。

彼の評価の確立が遅れたのは，彼の振付スタイルが conventional eclecticism だと思われた点にある。一面から見ればそれは真実である。前述したように，彼はインド舞踊とジャズ音楽を結びつけ，やがてスペイン舞踊の技法などを結びつけた折衷主義でもある。Loney の資料記録によれば「サダー（Sadder）によると，コールがインド舞踊をアメリカのジャズに結びつけるようになったのはブレックマン（Blechman）のせいであると証言している」[28]（p. 41）とある。Loney は eclecticism について触れず，独自性を強調し，Cole を「膝の技法を開発した最初の人」（ibid. p. 42）としている。しかしこの技法はスペイン舞踊の技法である。

80年代になると fusing の観念が肯定的に使用され，ダンスにおいては Tharp が83年に Dance Magazine 賞を受賞した。これこそ eclecticism のおもしろさ，fusing の現代的性格について考えるべき契機と思われる。

（2）Break dance の意味

Break dance の評価も80年代に見られたが，その出現は「1973年，ブロンクスのゲットー（ghetto）に発生した」（Picula）[34] も

ので,「ジェームス・ブラウンの“オン・ザ・グッド・フット”に合わせてかっこ良く踊った少年達が出現し，人々はそのまわりに群った」(Marlow)[30]。彼等は80年代になるとTVや映画で紹介され，1984年にDance Magazineにおいて数多い論文が並べられた。

踊り手は男性の成人式を象徴するかのように，力と難技で疑似闘争を行い，Tharpの半脱力と類似した動きをロボットのように行う。Béjart[注11]の男性中心の作品構成と時代主潮に共通性も感じられるが，ブラジルやアフリカの成人式に見る古代からの通過儀式とも類似する。

街頭でのperformanceということではPost modern danceをひきつぐものだが，Rainer[35][注12]などの技法否定と反対に，70年代後半の技法の回復の風潮（Siegel）[37]にのり難技を示す。一方でdisco. につながるPoでもあり，流行してMuともなった。つまり結果的に現代都会におけるfusing cultureであり，民俗・儀式，前衛性・大衆性，Mu・Po，少年の暴走・芸能，動きにおけるfusingなどと把えられる。

（3）Twyla Tharpをめぐる議論

Tharpの作品はクラシック音楽を使用する場合でもJDのidiomが織り込まれている。彼女の作風は，巧みな混合美であり根底にはsyncopationがある。混合する素材は過去に流行したstepなどである。「トワイラ・サープは我々の過去となったジャズやタップや社交ダンスなどに深い興味を示している」（Jowitt）[23]。それは大きな変革が，より大きな犠牲を払わずに行えない現代の都会生活の閉そくに対して，一つの安らぎを与えるものなのかも知れない。Siegelは「彼女は不気味なほど現代の鼓動に共鳴している」[37]と述べた。実際1976年のJoffrey Balletでは，30分以上のアンコールを記録し，70年代最大のeventとなった。

創作とは無からの創造であり，独自な開発のみに意味を見る（本質において否定すべきでないが）立場からはconventional eclecticismと批判も起こる。例えばPost Modern danceの命名者であるKirby[24]は彼女を新しい芸術運動の担い手として認めずCunningham[注13]やNikolais[注14]と同様に過去のMと同列においた。83年度のDance Magazine賞の受賞は本来70年代に受けるべき人なのである。Tharpの受賞がのびたことは，否定的風潮もありながら，認めざるを得ない時代の流れを示し，同じ流れがColeの評価を高め，Break danceを是認させたものと思われる。

展　望

現代JDはSyncopationを持ったfusingであることは以上見たが，こうした動向は，外来のものであるJDを，日本の都市生活と混交したスタイルを創ることや，特にインド舞踊とSyncopationが結合したように，日本の伝統芸能にfusingする可能性を示唆している。というのは卑しい出生の白拍子がお国歌舞伎となり，放下僧の芸能や能を取入れた実例が今日の歌舞伎の様式美に結実しているからでもある。

筑波大学体育センターにJDの正課授業が加わったのは奇しくも1983年，世界の潮流と対応するJDの折り目にあたる。現代JDを展望する上で，ささやかながら一つの役割があるものと思われる。

注　記

注1）De Mille, A.（1909～　）B. Muの振付師（以下振と略,）著術あり（以下著と略）。

注2）Robbins, J.（1918～　）B. Mu振，New York City Ballt（以下NYCBと略）常任振。

注3）Ailey, A.（1931～　）黒人M振。

注4）Balanchine, G.（1904～1983）B. Mu振。NYCB設立。現代バレエの祖。著。

注５）Humphrey, D.（1895～1958）　M. Mu 振。著。
注６）Weidman, C.（1901～1975）　M. Mu 振。著。
注７）Fokine, M.（1880～1942）　B 振，モダンバレエの祖。著。
注８）Duncan, Ⅰ.（1878～1927）　M 振，M の祖，著。
注９）Graham, M.（1893～　）　M 振。注５と双へき，著。
注10）Taylor, P.（1930～　）　M 振，注10の門下。著。
注11）Béjart, M.（1928～　）　B 振，著。
注12）Rainer, Ⅰ.（1934～　）　前衛的（以下前と略）M 振，著。
注13）Cunningham（1919～　）　M 振，前，著。
注14）Nikolais, A（1912～　）　M 振，前，著。

引用・参考文献

1）Barzel, A., "History of social dancing, " in Chujoy, A.（Ed.）The dance encyclopedia, Simon and Schuster: New York, 1962. pp. 842-43.
2）Bourcier, P., Histoire de la dance en Occident, Edition du Seuil: Paris, 1978.
3）Chujoy, A. and Manchester, P. W., The dance encyclopedia, Simon and Shuster; New York, 1949. p. 998.
4）Clarke, M. and Crisp, C., The history of dance, Orbis Pub. Limited: London, 1981.
5）Clarke, M. and Vaughan, D., The encyclopedia of dance and ballet, Rainbird Reference Books Limited; London, 1977. p. 376.
6）Crips, C. and Thorpe, E., Ballet, Hennerwood Pub. Limited: London, 1977. p. 68.
7）Croce, A., Joffrey Jazz, Knopf: New York, 1973.
8）Croce, A., The Fred Astaire and Ginger Rogers book, Knopf: New York, 1972.
9）Dance Magazine, from Vol. LⅩⅧ-Ⅰ till LⅩⅧ-Ⅱ, 1975-1984.
10）De Mille, A., The book of the dance, Golden Press: New York, 1963. p. 63.
11）De Mille, A., America dance, Macmillan Pub. Co. : New York, 1980. pp. 11-54.
12）Duncan, I., The art of the dance, 3rd（Ed.）Theatre Arts Books: New York, 1977. pp. 66-70.
13）Facciuto, E. L., The Luigi Jazz dance technique, Darbleday: New York, 1981.
14）Fisher-Manchestermann, U., Jazz dance and jazz gymnastics, Sterling: New York, 1978.
15）Fletcher, T., 100 years of the Negro in show business, Burdge & Co. : New York, 1954. p. 193.
16）Frich, E., The Matt Mattox book of jazz dance, Sterling: New York, 1983.
17）Giordano, G., Anthology of American jazz dance, Orion Pub. House: Ilinois, 1978.
19）Handy, W. C., Father of the blues, The Macmillan Company: New York, 1941. p. 226.
20）Hazan, F., Dictionnaire du ballet moderne, Dal aporte: Paris, 1957.
21）Horst, L., and Russell, C., Modern dance forms, Dance Horizons: New York, 1969.
22）Hughes, L. and Meltzer, M., Black magic, Prentice-Hall International Inc. : London, 1967.
23）Jowitt, D., "Twyla tharp", in Livet, A.,（Ed. ）, Contemporary dance, Cross River Press: New York, 1978. p. 146.
24）Kirby, M., "Contemporary dance", in Livet, A.,（Ed. ）, Contemporary dance, Cross River Press: New York, 1978. p. 158.
25）Kirstein, L., The book of dance, Garden City Pub. : New York, 1942.
26）Koegler, H., The concise Oxford dictionary of ballet, 2nd（Ed. ）, Oxford University Press: London, 1982. p. 459.
27）Loney, G., "The legacy of Jack Cole, " Dance Magazine, XLⅧ-4 : 40. 1974.
28）Machabey, A., La musique de dance, Presses Universitaires de France: Paris, 1965.
29）Mahoney, B., Jazz dance, "in Reynolds, N.（Ed. ）, The dance catalog, Harmony Book: New York, 1979. p. 151.
30）Marlow, C., Break dancing, A Starbook Pub. : New Jersey, 1984. p. 14.
31）Martin, J., The dance, Tudor Pub. Co. : New York, 1946.
32）Martin, J., Introduction to the dance, Norton: New York, 1939. p. 222.
33）Noverre, J-G.（Trans. Beaumont, C. ）, Letter sur la danse et sur les ballets, Dance Horizons: New York. 1966.
34）Pikula, J. "Ribeiro, battle, and meet, " Dance Magazine, XL Ⅴ: 42, 1984.
35）Rainer, Y., "Aqasi survey of some minimalist tendencies" in Copeland, R. and Cohen, M.（Ed. ）, What is dance, Oxford University Press: New York, 1983. pp. 326-28.
36）Sachs, C.,（Trans. Schonberg, B. ）World his-

tory of the dance, The North Library: New York, 1963.
37) Siegel, M. B., The shapes of change, Houghton Mifflin Co. : New York, 1979. p. 351.
38) Siegel, M. B., "New dance", Dance Magazine, XLⅧ-4 : 4). 1974.
39) Smith, C., Musucal comedy in America, Theatre Arts Book: New York, 1950. p. 155.
40) Sorell, W., The dance through the ages, Thames and Hudson: London. 1967.
41) Sorell, W., The Marry Wigman book, Wesleyan University Press: Middletown, 1973.
42) Spaeth, S., A history of popular music in America, Random House: New York, 1948. p. 369.
43) Stearns, M. and J., Jazz dance, Schirmer Book: New York, 1979.
44) Terry, W., The dance in America, Harper & Row Pub. Inc. : New York, 1971.
45) 若松美黄，ダンス，ぎょうせい出版，1983